

〈一般研究課題〉 愛知県の間伐材から制作した拍子木による
アートの発信

助成研究者 愛知県立芸術大学 深町 浩司
愛知県立芸術大学 森 真弓



愛知県の間伐材から制作した拍子木による アートの発信

深町 浩司(愛知県立芸術大学)
森 真弓(愛知県立芸術大学)

Transmission of art using “Hyoshigi” made from thinned wood in Aichi Prefecture

Koji Fukamachi, Mayumi Mori
(Aichi University of the Arts)

Abstract :

"Kyo-mei," a social activity project launched by Mori and Fukamachi in 2021, has been utilizing Hyoshigi which are simple and easy for anyone to pronounce, to develop Hyoshigi experience programs and Hyoshigi production courses for local residents and children, and to create a place for people to interact with each other. The project has also aimed to increase interest in the natural environment and social issues around us while encouraging everyone to express themselves through the concept of using clappers to create and share their own free tones.

In this study, activities will be conducted using Hyoshigi made from various kinds of trees in Aichi Prefecture. Basic research on Hyoshigi playing techniques and acoustics will be conducted, and a format developed in the "Kyo-mei" project will be used to create Hyoshigi made from different types of wood and combinations of uneven parts to study a variety of timbres. Furthermore, we will apply state-of-the-art percussion instrument methods to the Hyoshigi technique, and research techniques to reproduce these tones to a high degree. The project will create music using the results developed in these studies, and children will learn and present the music. In addition, a citizen-participatory Hyoshigi handcrafting and performance program and a program to share the sounds of logs, twigs, and other natural wood sounds will be developed.

Through a series of activities, the project aims to make the arts more accessible to local

residents and to encourage them to think more closely about the local natural environment. Through the experience of many people freely striking Hyoshigi and logs together to produce a variety of tones, the program aims to encourage people to think freely without being bound by preconceived notions of "good sound / bad sound," to recognize that any sound produced by anyone has value, and that the personality behind the sound has irreplaceable value. This will lead to the realization that any sound made by anyone has value, and that the personality behind the sound has irreplaceable value as well. The goal is to encourage people to take an interest in various social issues and problems, such as freedom of expression, elimination of discrimination, and cross-cultural understanding.

はじめに

2021年に森と深町が中心となり立ち上げた社会活動プロジェクト研究「共鳴～Kyo-mei」は、シンプルで誰もが気軽に発音できる拍子木を活用し、地域住民や子どもが参加する拍子木体験プログラムや拍子木制作講座を展開し、人々が交流する場を創出してきた。また、拍子木で自分の自由な音色を発しそれを共有するという理念により、誰もが表現活動を行いながら、身近な自然環境や社会課題に対する関心を高めることを目的として活動を行ってきた。

本研究では、愛知県の多種の木から作る拍子木を用いて活動を行う。拍子木の奏法や音響の基礎研究を行い、「共鳴～Kyo-mei」で開発したフォーマットによって、異種の木や不均一な部位をあえて組み合わせた拍子木を作り、多様な音色を研究する。さらに、最先端の打楽器メソッドを拍子木奏法に応用し、それらの音色を高度に再現する奏法を研究する。これらの研究で開発した成果を用いた楽曲を制作し、子どもたちがその楽曲を学び発表する。また、市民参加型の拍子木手づくり体験と演奏体験プログラム、丸太や小枝など自然のままの木の音色を共有するプログラムも展開する。

一連の活動によって、地域の人々にとって芸術がより身近な存在となることと、人々が地元の自然環境や社会についてより身近に考えるようになることを目指す。また、多くの人たちが拍子木や丸太などを自由に打ち合わせ多様な音色を発する体験を通じて、「良い音／悪い音」「楽音／非楽音」「価値のある音／価値の無い音」という既成概念に捕らわれない自由な発想を持ち、誰がどのように発する音であっても価値があり、発せられた音の背景にある人格にもかけがえのない価値があることへの気づきへと導く。これによって、表現の自由や差別撤廃、異文化理解など、様々な社会課題や問題について人々が関心を持つきっかけとなることを目指すものである。

1 拍子木の奏法研究

本研究では、日本において伝統的に用いられてきた3種の拍子木の奏法と音色を研究してそれらを踏襲しつつ、オリジナルの拍子木を用いた新たな奏法を開発していく。

1.1 伝統的な拍子木3種の概要

伝統的に用いられてきた3種の拍子木とは、歌舞伎で使用される拍子木、祭りや夜警で使用される拍子木(以下：祭りの拍子木)、大相撲で使用される拍子木である。

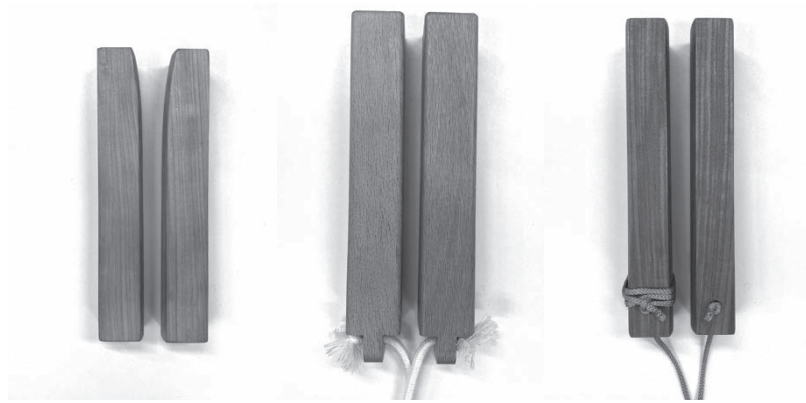


図1 伝統的な3種の拍子木(左:歌舞伎、中:祭り、右:大相撲)

① 歌舞伎の拍子木

歌舞伎界では「柀(き)」と呼ばれている。手元が太く先端に向けてやや細くなる角棒状で、先端だけ丸く成形され、他の面は平らである。発音の際は、先端の丸い部分を打ち合わせる。主に檜の木から作られるが、本研究では桜の木から作られたものを使用した。(図1、左)

② 祭りや夜警(火の用心)の拍子木(以下:祭りの拍子木)

檜など硬質の材から作られる。完全な角柱状で、全ての面が平らである。発音の際は、平らな面同士を強く押しつけるように打ち合わせる。(図1、中)

③ 大相撲の拍子木

この拍子木も「柀」と呼ばれる。伝統的に桜の木が使われ、平たいかまぼこ状に成形され、片方の手元に組紐が巻かれる。発音の際は、拍子木の根元同士を当ててから先端同士を当てる技法(二度打ち)を行う。これはきわめてユニークな技法である(図1、右)。

1.2 伝統的な拍子木の音響解析

伝統的な拍子木の発音原理をより正確に理解するため、詳細な音響解析を行った。まず木片単体をハンマーで打撃し、次に通常の技法で打ち合わせ、それらの音響を比較した。その結果(波形・

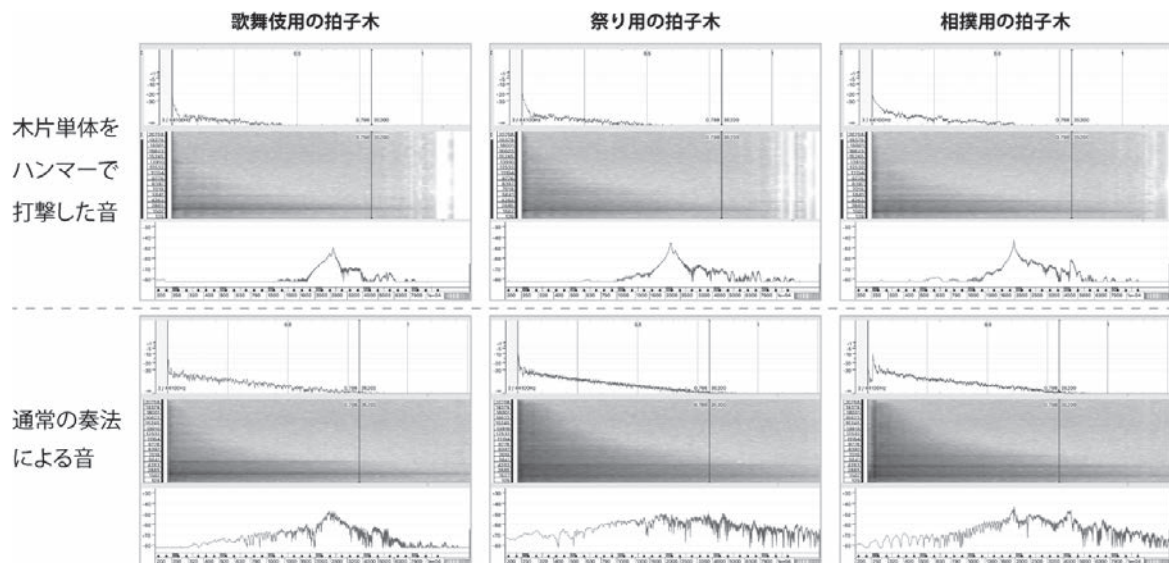


図2 伝統的な3種の拍子木の音響解析

スペクトログラム・インパクト時の周波数分布)を図に示す(図2)。3種の拍子木とも、木片単体をハンマーで打撃した際に一定のピッチが明確に確認できる。これは、棒状の木片の固有振動によるものだと考えられる。

スペクトログラムと周波数分布を見ると、3種の拍子木とも、ハンマーで打撃した時に比べ通常の奏法で打った時に多くの雑音成分が発生している。特に、祭り用の拍子木を通常の奏法で打った時は極めて多くの雑音成分が発生し、一定のピッチは確認できない。これは、角棒状の面と面を打ち合わせる奏法によって、空気の圧縮・膨張が強く起こったためだと考えられる。また、他の2種の拍子木においても、拍子木の面と面が空気を圧縮しそれが瞬時に膨張することで多くの雑音が発生しているのだと考えられる。

音響の比較結果から、拍子木の音は、木片自体の固有振動による音と木片同士が空気を圧縮・膨張させる音の二つの要素が混ざり合い独特の音色を生み出しているということが理解できる。また、拍子木は「2本の木が打ち合わさることによって初めて音色が成立する」ということが確認できる。

1.3 オリジナル拍子木を用いて伝統的な音響を再現する

本研究で使用するものは「共鳴～Kyo-meï」が開発したフォーマットの拍子木である。25mm×30mm×200mmサイズとし、直面/曲面という違いをつけている(図3)。これは、「拍子木を打つというシンプルなアクションの中で、様々な音色の表情や打感からフィードバックされる精細な情報差が現れるように¹⁾」また「子どもから大人まで幅広い年代に体験してもらい、室内で聞くのに適当な音量²⁾」になるよう配慮されている。また、我々はオリジナル拍子木を用いて伝統的な拍子木の技法を模倣する奏法を開発した³⁾。それらは、歌舞伎の拍子木を模した「しばい打ち」、祭りの拍子木を模した「まつり打ち」、大相撲の拍子木を模した「すもう打ち」の3奏法である。本研究では、これらの3奏法と伝統的な拍子木の音響を考察する(図4)。図に示した周波数分布は、インパクト時のものである。

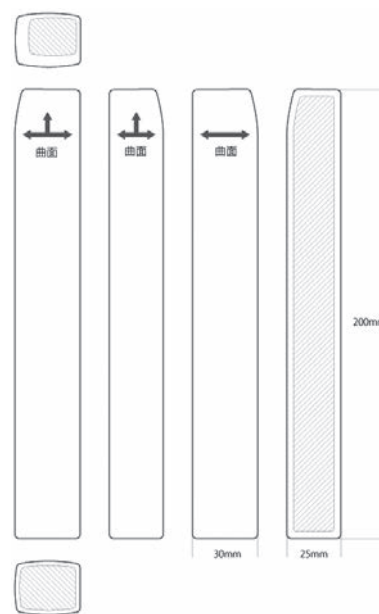


図3 拍子木のフォーマット

歌舞伎の拍子木と「しばい打ち」の周波数分布およびスペクトログラムを見ると、限定された周波数帯にピークが見られ、そのピークは一定程度持続していることが分かる。これは、拍子木それぞれの固有振動の割合が多い音色であると考えられる。祭り用の拍子木と「まつり打ち」の周波数分布とスペクトログラムを見ると、小さなピークがいくつもあり低音から高音まで幅広い周波数帯が強く出ている様子が分かる。これは、拍子木の面と面を同時に強く打ち付ける奏法によって空気の圧縮・膨張が起きていると考えられる。大相撲の拍子木は既述のとおり二度打ちの技法を用いる。このため「すもう打ち」では、左手に持つ拍子木の根元にゴム紐を巻き付け、図4にあるように、①で根元同

¹ 森, 深町 2022 「共鳴～Kyo-meï」プロジェクト 活動報告～共に鳴り、共に在る～」 p.37.

² 森, 深町 p.37.

³ 森, 深町 p.37.

士を当てた後、②で先端を当てるといふ順番で発音することで、二度打ちの技法を再現している。波形の頭に連続して2回のピークが見られるのはこのためである。

これらの比較から、伝統的な3種の拍子木の技法を模倣した3奏法は、それぞれの音響的特徴を再現することでそれぞれの音色の意味を再現していると言ふことができる。

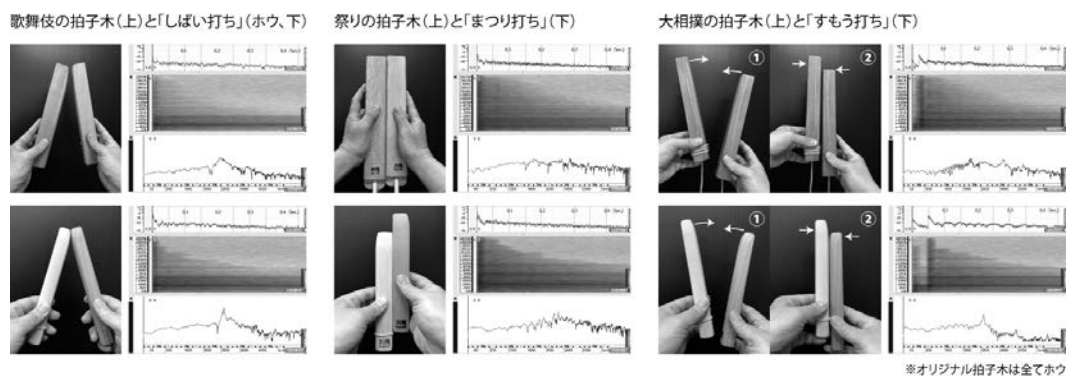


図 4 伝統的な3種の拍子木とオリジナル拍子木の音響比較

1.4 異種の木を打ち合わせる～異なる個性が混ざり合う

拍子木は現在、先に述べた伝統的な3種の拍子木以外に、仏教で読経の際に用いるものや、子どもの音楽教育で用いられる小型のものなど、様々な種類のものが普及している。これらのどの拍子木も、同種の木から切り出した2本の木片を1組として打ち合わせることが常である。

柀(歌舞伎の拍子木)の名手として名高い竹柴蟹助(狂言作者、1904-1989)は、柀の制作においては1本の木材を割って背中合わせに2本の木片を削り出すことが常識だと述べている。これは、同種を木の同質の部位を使うことで2本の木片の固有振動が同様になり、それによって拍子木からより純粋な音色を引き出すことを狙うものであろう。また、教育音楽で用いられる楽器としての拍子木は、ローズウッドなど希少種のなかで同じピッチ(音高)を持つ2本の木片が選ばれ組み合わせられる。これは、音の3要素の中の「ピッチ」という1要素を拍子木の仕様として設定し、そのクオリティを高めることで、音楽における楽器としての拍子木の「良い音」という定義を生み出しているのだと考えられる。

本研究では、伝統的な拍子木の音色を模倣するだけでなく刷新する表現も行い、音楽における「良い音」という定義に当てはまらない多様な音色の創出を目的としている。このため、オリジナル拍子木の演奏において、木材の種類、木目や節などの状況にこだわらずに切り出した異種の木片を打ち合わせる奏法を考案し、その音響的效果を検証した。

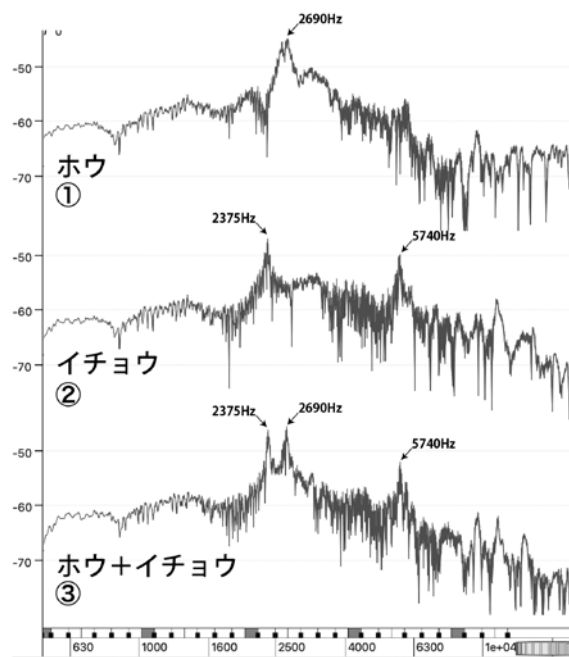


図 5 異種の木材を組み合わせて打つ(しばい打ち)

図5は、①ホウ2本による拍子木、②イチョウ2本による拍子木、③ホウとイチョウ1本ずつによる拍子木の、インパクト時(発音の瞬間)の周波数分布を示すものである。それぞれの周波数のピークを見ると、①のピークは2690Hz付近で、②のピークは2375Hz付近が最大で、次が5740Hz付近で、③のピークは2375Hz付近、2690Hz付近、5740Hz付近である。③では、①のピークと②のピークの両方が反映されていることが分かる。これらのことから、異種の木片を組み合わせた場合、それぞれの木が持つ音響的特性が混ざり合うと考えることができる。

このホウとイチョウという異種の木片の組み合わせによる効果はひとつの例に過ぎない。また、同種の木片の組み合わせであっても木目や節の状況が違えば硬さや重さに違いが出て、その違いが拍子木の音色に影響を及ぼすことは容易に想像できる。これらのことから、拍子木は「2つの木片が持つ個性が混ざり合う」または「2つの木片の個性が互いに影響し合う」ということができる。

1.5 新しい奏法の開発

作曲家の坂田直樹⁴氏と共同により、オリジナル拍子木を用いた新しい奏法を考案した。

① 打面の変更

拍子木の様々な面を打ち合わせることによって、ユニークな音色を表現する。広い面同士を当てる、狭い面同士を当てる、底面を打ち合わせる、底面と角を打ち合わせるなどによって独自の音色が出る。これらの奏法は指の形や動作管理を精密に行うことが必要で、一定のトレーニングを要する高度な奏法である(図6)。

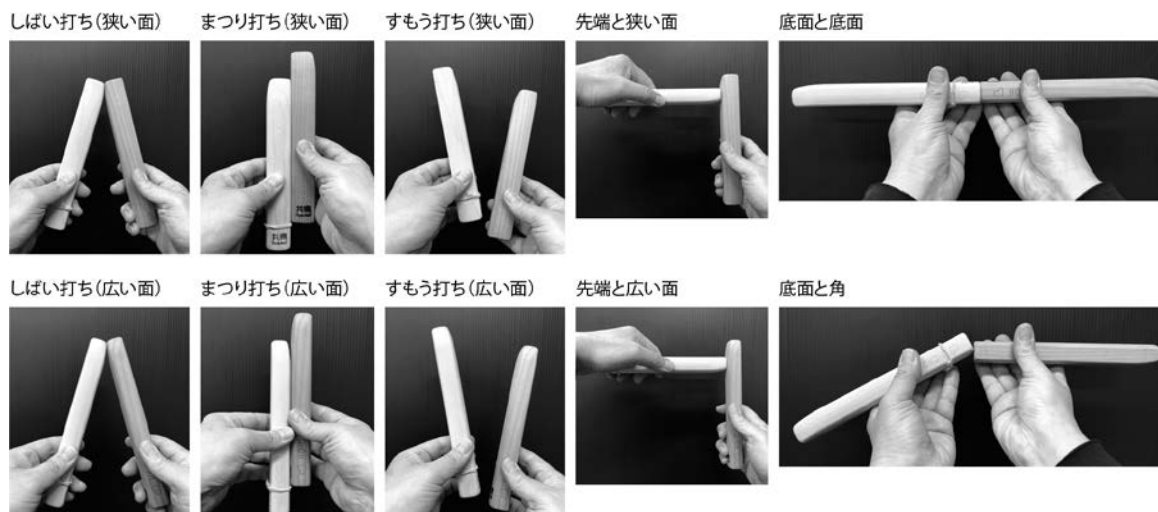


図6 様々な面を打つ

② 拍子木を持つ指の動作を変える

この奏法は、スティックやマレットを持つ指の動作変化によってスネアドラムやティンパニの音色変化をもたらす技術を応用したもので、「Pah(パー)、Goo(ゲー)」の指動作メソッドに基づくも

⁴作曲家、愛知県立芸術大学卒業、パリ・エコール・ノルマル音楽院で高等ディプロマを取得、パリ国立高等音楽院(CNSMDP)作曲科第2課程修了、SACEM賞、第36回入野賞、武生作曲賞、2017年度武満徹作曲賞第1位、第66回尾高賞、第28回芥川作曲賞受賞。名古屋フィルハーモニー交響楽団第3代目コンポーザー・イン・レジデンス。「共鳴〜Kyo-me!」クリエイティブ・アドバイザー。

のである⁵。

Pah：拍子木を持つ指の力を抜き、指を開くようにして柔らかく持つ。

Goo：拍子木を持つ指に力を入れ、指を握るようにして固く持つ。

実際の指動作とそれによる音響効果は図7のとおりである⁶。Pahでは立ち上がり時に2710Hz付近の周波数が突出しており、固有振動が多く発生しているのだと考えられる。Gooではその突出が見られない。これは固有振動が抑制され、拍子木同士の接触時に空気の圧縮・膨張が強く起きて直接音が強調されているのだと考えられる。

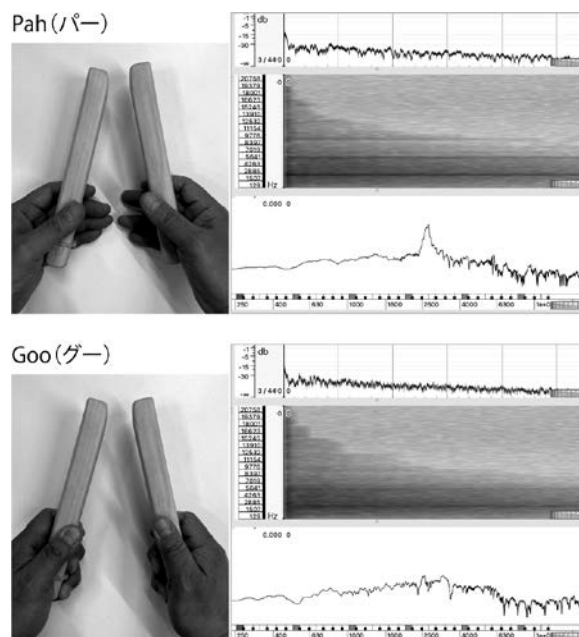


図7 指動作を変えて音色を変える(芝居打ち)

2 愛知の多様な木を用いる

さて、本研究では拍子木の素材として、間伐材を取り扱うことを掲げている。間伐とは、木の生育を促すことを目的に木々を間引くというものであるが、そこで出る間伐材は安定した質(節や密度など)が得られず均質に使うことが難しいため、社会的には製品としての利用価値が低いとされる。多くの人は、間伐材は不要で廃棄されるものであると勘違いしているが、実際は単なる不揃いなものであり、違う見方をすれば唯一無二、ユニークな素材ということになる。そしてそのばらつきに対して、人々はそれを個性と捉えて、魅力を感じるようである⁷。つまり、社会的価値が低いと解釈しながら、一方では魅力的に感じているということである。実はこれは、「価値のある音／価値の無い音」という解釈が生まれるプロセスと似ている。音の価値についての解釈は、本人がその音に対してどのような価値基準を持つかによって変化し、個人差があるものだからである。今回の研究で取り扱う木は、「市場価値はないが、その背景に魅力を見出すことのできるもの」と捉え、この観点に沿って、2箇所から木材の提供を受けた。

まず、西垣林業株式会社⁸から、建設現場でウッドデッキ用として使用されたヒノキの間伐材で、加工後に余って捨てられてしまう端材と、愛知県内で伐採された多種の雑木を提供いただいた。これらは、製品として市場に出回るものではない。次に、岡崎市明見町にある宮崎神社から、ご神木であった大イチョウの端材を提供いただいた。これは、『岡崎市ふるさと景観資産』の名木として、地元の人に愛されてきたご神木であったが、枯死により倒木の危険があることから令和4年に選定解除され、伐採されたものである。かなりの大木であったため、何かしらの形で地元のために利用できるように製材された。今回はこれらを利用して、拍子木にまつわる2つのプログラムを実施することとした。

⁵ 深町浩司 2019『新しい打楽器メソッド～ストロークをシステム化する～』p.47-54

⁶ 音の立ち上がり(インパクト)時の周波数分布を示している。

⁷ <https://morinogakko.jp/kanbatsuzai/>

⁸ <https://www.nishigaki-lumber.co.jp/kenchiku>

3 自治体との連携による活動

日進市の学び支援課(旧・生涯学習課)と連携して、市民参加型の拍子木の手づくり体験と演奏体験をする「拍子木制作ワークショップ」と、市内の子どもたちが拍子木楽曲を初演する「子ども拍子木演奏プロジェクト」を行った。この2つのプログラムは、2つの側面から拍子木に向き合い、それぞれ気づきを得るためのものである。1つは、愛知県産の木を使って拍子木を手作りし、その音を奏で味わうもの、もう1つは、愛知の様々な木から作られた拍子木を楽器とし

て取り扱い、その木の背景を心に留めながら、楽曲として奏でるものである。最後に、それぞれのプログラムを経た参加者全員で、拍子木を介した交流を行った。この3つを関連させることによって、参加者に多角的にものを「感じる」ための気づきを与えることを狙った(図8)。

① 拍子木制作ワークショップ

このプログラムは、愛知県の県産材であるヒノキの間伐材を素材として、参加者自らが“マイ拍子木”を作るものである。拍子木を手作りし奏でることで、日常的には体験することのない視点から木に触れ、その特徴を肌感覚で捉えてもらうという試みである。参加者は、9歳から70歳代までの幅広い年齢層が集まった。

本プロジェクトが開発したオリジナル拍子木と同サイズにカットしたものを基本の木片として用意し、参加者に加工作業を行ってもらった。おおよそ5段階のプロセス(図9)を90分で完成できるように指導した。既述のように、実際のオリジナル拍子木は4つの面に特徴を持たせており、制作は木工職人が手作業で行っている。ワークショップでは、作業環境や時間、参加者の技能を鑑み、1つの面のみに丸みをつける形状とした。

最初に、素材となる木とその背景について説明した。香りのよいヒノキであることと、とある施設の建設に関係する愛知の木であるというストーリーによって、参加者にイメージを持たせてから作業に取り掛かった。作業そのものはさほど難しいものではなく、殆どが木を滑らかに削る作業であ

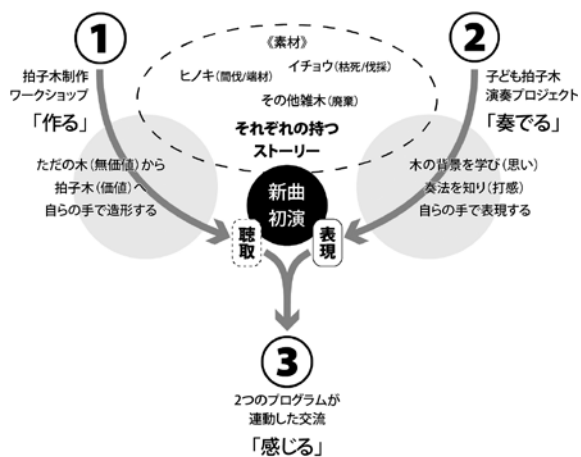


図8 プログラム構成図



図9 木片の加工プロセス(左から右へ)

り、木という素材そのものに向き合うことになった。また、今回の素材はそもそも節や歪みがあり製品にできない木であったため、木片になった段階でかなり個性的な状態であった。つまり、完成を目指すためには、それぞれが自分の木の個性を理解し作業を行う必要があった。そのため、木を観察し感じ取ることを促しながら、参加者は仕上がりイメージを頭に描きながら、それに向かって成形作業を行った。まず、丸みをつける箇所にあらかじめカットする線を入れておき、そこを鋸で切り落とす。そこから、角張っている箇所を指で確かめながら、石膏ボードヤスリで丸めていく。おおよそ全体に角が取れたら、粗目のヤスリで全ての面がなめらかになるように削り、中目、細目のスポンジヤスリで整えて完成させた(図10)。

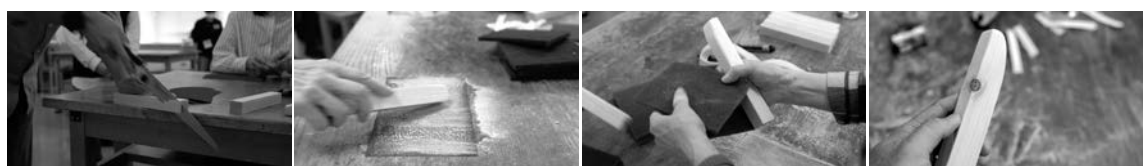


図 10 ワークショップ作業風景

完成後には、“マイ拍子木”の証として、焼印を押した。そして、伝統的な3つの奏法のレクチャーを受けて、参加者はそれぞれが作った拍子木から発せられる、唯一無二の音響を体感した。

② 子ども拍子木演奏プロジェクト

作曲家の坂田直樹氏が、先端的な奏法を盛り込んだ拍子木だけによる新作楽曲《こだまの輪》を作曲し、それを日進市民会館において市民の前で演奏発表するプロジェクトで、演奏者は日進市内の中高生(以下：子どもたち)である。我々は坂田氏に対して、拍子木は愛知県産の材で作ったものを用いること、多様な音色による芸術表現を盛り込むことをリクエストした。《こだまの輪》は、拍子木の音色変化および音量・リズムの変化だけで構成された。言うまでもないが、楽曲に具体的な旋律(メロディ)や和音は登場しない。

古来拍子木は、その音色そのものが言語的な意味を持っていた。それは例えば、かつてどの町でも冬の夜に鳴り響いた夜警の拍子木の音は「就寝前は火の扱いに注意せよ」という意味を持つ警告音(サイン音)であったことを考えれば明らかである。《こだまの輪》で使用する「しばい打ち、まつり打ち、すもう打ち」は、拍子木の音色が持っていた意味の再現を試みる奏法である。そこに新たな奏法を加えたこの楽曲は、旋律や和音に頼らず、拍子木の音色が持つ様々な意味によって展開する音楽であり、拍子木の音色をメディア(様々な意味をもたらす媒体)として再構築し発信させる試みである。

- ・楽曲名：《こだまの輪～拍子木アンサンブルのための～ Kodama no wa for hyoshigi ensemble 2023》
- ・演奏者：あいちこだま子どもアンサンブル(Kodama Kodomo Ensemble in Aichi)
- ・監修・指導：深町浩司
- ・演奏会場：愛知県日進市民会館エントランスホール(2023年4月29日)

楽曲《こだまの輪》は4つのパートから成り、1パート最大2名(全体で最大8名の編成)で演奏可

能である。楽曲で使用した拍子木の材はすべて愛知県産で、①ケヤキ、②ツバキ、③ブドウ、④ホウ、⑤イチョウの5種である。①～④は西垣林業より提供された端材、⑤は宮崎神社から伐採されたご神木である。

既述のように、伝統的な拍子木は同種の木から2片を取り1組とすることが常である。しかし、今回の楽曲《こだまの輪》の演奏においてはこの伝統にとらわれず、異種の木片をランダムに組合せて1組の拍子木とした。それは、ブドウとイチョウの組合せ、ホウとケヤキの組合せ、などである。最終的に8組の拍子木を完成させ、それぞれの拍子木が非常にユニークな存在となった(図11)。

《こだまの輪》の演奏者は、日進市内在住・在学の中学生または高校生で楽器経験1年以上であることと楽譜がある程度読めることを条件として募集し、中学生5名と高校生1名の参加を得た。そこに本学打楽器専攻生2名を加え、計8名による拍子木アンサンブルグループ「あいちこだま子どもアンサンブル」を結成した。子どもたちが拍子木の扱いに慣れる時間をじゅうぶん確保するため、プロジェクトの期間を約1ヶ月間とし、その間の週末に計4回のリハーサルを行った。初回リハーサル時には、プロジェクトの目的と拍子木の概要について資料を用いて学習しながら、宮崎神社の大イチョウが拍子木に加工されるまでの経緯について理解を深めた(図12)。

2023年4月29日に、50名の来場者の前で《こだまの輪》の初演が行われ(図13)、会場には楽曲のスコア(総譜)が展示された。演奏終了後は、会場にて聴衆と子どもたちが交流した。演奏で使った拍子木に興味を示す人や、スコアを見て拍子木の奏法の多様さに驚きを示す人が多かった。

以下は、作曲者である坂田直樹氏の、初演に対する評価である。

“リハーサルを重ねたのちの本番では、多様な音色による立体的な音楽が聴こえてきた。このように、ピッチ表現をしない拍子木だけで成立する音楽を、子どもたちが演奏し得たとことを嬉しく思う。また、今回のプロジェクトでは愛知県産の多種の木による拍子木が用いられた。既製品では得ることのできない、多様な音色による合奏を楽しんだ。”

③ 2つのプログラムが連動した交流

日進市民会館のライトコートにて、「拍子木制作ワークショップ」受講者と「子ども拍子木演奏プロジェクト」参加の子どもたちが集まり、拍子木を介して交流を行った。



図 11 異種の木を組み合わせた8組の拍子木



図 12 宮崎神社の大イチョウについて学ぶ



図 13 《こだまの輪》初演の様子

あらかじめ台座の上にディスプレイした丸太や小枝など、様々な種類の“愛知産”の木を用意し、「木は、どのようなものでも音を発する」「誰しも木を叩けば音が出る」「人が発する音は、どのようなものであっても価値がある」ということを理解するために、各自がそれらに自由に触れ、自由な音色表現を行い、更にそれを全員で感じ取り共有するという試みを行った。

④ 参加者の感想

プロジェクトに参加した子どもたちへのアンケートでは、「今までこのような楽器に出会ったことがなく、不安な気持ちと半分楽しい気持ちだった」「最初は両手に違うものを持つという違和感があり慣れるのに時間がかかった」など、最初は戸惑ったという記載があったが、「木の違いで音が変わるなど様々な発見があり良い経験になった」「木の種類が違うだけで音色が違い、拍子木だけで楽曲ができることに驚いた。」「奏法を替えるだけで音色の感じ方が変化して面白いなと思った」「木の新しい一面を知ることができた」「音色が違うことに驚き、唯一無二の音を手に入れたことが嬉しかった」「拍子木の『リズムのハーモニー』を体感でき、不思議ながらも心地よかった」などの記載があり、子どもたちは一連の体験から多くのことを学んだと言える。また、「木はなんでも鳴るのがすごいなと思った」「一つの工夫でも、色々な変化が起きることがわかった」「どんな楽器も、奏法によって自由な表現ができることを学んだ」「楽器がどのように鳴っているのか、どういう振動をしているのかなど、打楽器の性質を学んだ」など、演奏を通じて木の性質や打楽器の特徴について学んだことが分かる。さらに、「愛知の木の音色を感じてみて、木でも種類や質の違いでいろんな音色を表現出来て楽しかった」「愛知県で伐採される木を拍子木にして音で継承することにとっても温かみを感じた」「楽曲を通じて美しい愛知県の木の音色を感じることができてとても良かった」など、愛知県の木を用いて活動したことについて高く評価する子どもが多かった。

《こだまの輪》聴衆へのアンケートでは、「拍子木だけで音楽が成立することが興味深い」という感想が多く見られ、「拍子木の持ち方を変えて音が変わることが興味深い」「木の種類が違くと音色も違うことに驚いた」「音に関して新しい捉え方をされていて興味深い」など、音色に関する感想や意見が多くあった。また、「新しいことを若い人たちがやることはとても良い」「またこのような公演をやってほしい」「地元でたくさん活動してほしい」など、我々の活動を支援する声や、今後の研究活動のヒントになる意見があった。

4 まとめと今後の課題

3の「自治体との連携による活動」においては、子どもたちが楽曲を表現し、それを市民が聴取することで、そこから様々な意味のやりとりが自由になされる、すなわち拍子木の音色が持つメディアの機能によって、子どもたちと市民による言語を介さない—芸術を介した—コミュニケーションが成立する、ということを実証するのが目的であった。結果として、参加者の感想からも、これまでの「音楽」や「楽器」などの既成概念に囚われず、各自が音そのものを率直に感じ取ったことがわかり、プログラムの狙いは概ね達成できたと考える。このことから、多様な切り口から物事を捉えられ、感覚に訴えかけるような、まさに芸術が得意とする多彩なプログラムを提供していくことは有用であると言える。

ただし、今回実施できたのは日進市との連携によるもののみであった。また、木という素材の特性上、乾燥のための時間を年単位で見込まねばならず、長期的にかつ計画的に自治体との調整を図

らねばならない。今後は、多くの自治体について積極的に調査を行い、より多くの人々の価値観に触れ、そこに息づく様々なストーリーと共に、柔軟な姿勢でプログラムを開発しなければならないと考える。

このプロジェクトにおいて我々が重視するのは、プロジェクト参加者が芸術そのものとその周辺を理解すること(例えば西洋音楽における、偉大な作曲家の背景を知り様式や和声進行を学習することで作品をより深く理解する、というプロセス)ではなく、各自が芸術を介して様々な意味を自由に「自分ごと」として感じることである。これによって、芸術が神秘的な存在ではなく日常的なものであるという気づきをもたらし、芸術をより身近なもの、個人の自由な発想でその意味を感じ取るものとして位置づけるきっかけとしたい。そして、自由に物事を捉えられるようになった感覚で各自が社会を見つめ、そこに起こっている様々な事象の意味を改めて捉え直すことで、新たな価値を見いだしてもらいたい。

主な参考文献

竹柴蟹助 1978『柀の芸術』CBS Sony Inc.

深町浩司 2019『新しい打楽器メソッド～ストロークをシステム化する～』スタイルノート社

森真弓, 深町浩司 2022『「共鳴～Kyo-me」プロジェクト 活動報告』愛知県立芸術大学紀要第51号
P.29-42